

草田男の真面目な滑稽（三）

飯野幸雄

以下は、草田男の真面目な俳句の中から滑稽俳句だと思う句を並べてみることにする。

「蟹の飯炊き」詩に淫すとて妻泣くに

「蟹の飯炊き」は、蟹がブツブツと泡を吹いている様子と、ご飯の炊き上がる前に吹き上げる泡とが似ているところから来ている。それはまた、俳句一筋で頼りがいのない草田男に対しての妻の愚痴であり、いつまでもブツブツと切りがないのだ。

蟹雌雄我慢の紅爪天へかざし

「蟹の飯炊き」と同時に作られた句だが、草田男にしても妻に対して不満が無いわけではない。けれども蟹は紅爪を天へかざすものの振り下ろすことはできない。我慢我慢で夫婦ともども手を振り上げたままの滑稽さ。

吾妻かの三日月ほどの吾子胎^{やど}すか

有名な句。この「三日月」を胎児の形と解釈するのが一般的だが、まだ目立たないお腹の円みだと言えないだろうか。月満ちれば満月のようなお腹になる。期待大なのだ。

世の男性^{をとこ}白鳥^{あひの}仰向^{あおむか}きし咽喉^{のど}識^しれりや

白鳥が仰のくように細長い喉首を伸ばして鳴く。その咽喉のことを「世の男性」は「識っているのだろうか」と問う。草田男は「よくよく見てご覧なさい。喉仏がないのです」と。

一老鶯^{おとす}唱名^{なうた}一途^{いず}法^{はう}法^{はう}華^わ経^{けい}

草田男にもこんな句がある。俳句の初心者が鶯の鳴き声を「法華経」の音読みに引っかけて句を詠もうとした感がある。だが草田男はそここのところを「唱名」を持ち出し、「一」を重ね漢字だけの一句にした。

手の薔薇^{ばら}に蜂^{はち}来れば我王^{わがみ}の如し

これも有名な句。普通の薔薇は蜜が少ないから、寄って来る蜜蜂はほとんどいない。それなのに手に持つ薔薇に蜂が来た。ほら私は王様のようなだろう。この蜂は薔薇にではなく私を慕ってきたのだから。

小娘となりぬし吾子等鳩の行衛

草田男には三人の娘がいる。みな聡明な娘だが、幼児の頃はともかく段々と草田男の手に負えなくなる。水鳥の鳩はいったん水中に潜るとどこに浮いて来るか予想がつかない。小娘となった子ども達がこの先どこの世界に潜り込み、どこに浮いてくるものか草田男にも予想がつかない。最早お手上げの世界。

妻ら帰京待てる我が家は早やちちろ

妻子が揃って家を空けていたのが帰って来る場面。帰京を待っている我が家では早くも蟋蟀が鳴いていると至極普通の情景である。だが、帰って来るのは女ばかり（妻と三人の娘達）なのだ。帰って来れば蟋蟀の鳴き声以上にうるさい。だから「早やちちろ」と諦めているのだ。

初鴉 おほをそどり 大虚鳥 こそ光あれ

朝日俳壇選者の選者詠として新年の新聞紙上に発表された中の一句。大虚鳥は鴉のことで万葉集に大軽率鳥と載るが、大虚は大嘘と同義。鴉は大嘘つき鳥なのだ。この句には前書き「俳人自照」がある。つまりは草田男と大虚鳥は一体なのだ。「大虚鳥（草田男）こそ光あれ」と詠んだ。草田男の俳句は謙虚さと自信に満ちていると言えないだろうか。

完